

COVID-19 禍の静寂が支配するキャンパスで野生動物医学を沈思默考

酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 感染・病理学分野

医動物学ユニット/野生動物医学センターWAMC

浅川満彦 askam@rakuno.ac.jp

養鹿場化した圃場

札幌は誰でも知るが、その隣、江別なんて聞いたことはない。かつては、煉瓦の一大産地であったが、建材としての役割を終えた今、そこから江別をイメージするのは困難。大泉洋という賑やかな俳優がこの生まれというのは、いささかの助けになろうか。それに比して、知名度ではやや劣るが、ここでは数十年前から北海道の畜産を支えるべく酪農学園大学が気炎を吐いている。だが、市民には「養鹿（ようろく）をはじめたのか？」と訝られているかもしれない。たとえば、2021年4月5日夕刻、著者が帰宅中に土起こししたばかりのデントコーン用の実験圃場をご覧頂きたい。直ぐ脇の一般道で自動車を停め、一般の方（図1中央やや左）が入り込んでいるのだ。圃場に居る動物（図1中央右端）をスマホに写すためである。標的は融雪直後に現出した芽生えを一心不乱に採食する二ホンジカ（亜種エゾシカ）の群れ（図2上）。同時に奥（図2上の左側。野幌森林公園側）にも数頭確認されたので（図2下）、この辺りの個体群を構成するのは20をはるかに超えよう。



図1. 自動車を停車し、酪農学園大学実験圃場に入り込む人（中央やや左；2020年4月5日撮影）



図 2. 酪農学園大学実験圃場の二ホンジカ遠望（上；背景は講義・研究棟）と拡大（下；背景は野幌森林公園の木立；ともに 2020 年 4 月 5 日撮影）

実は、このような形で群れ化したのは 4, 5 年間からで、地域住民の噂になっていた。交通事故を懸念したこの地域の自治会はシカ飛び出し注意の看板を江別市に要請、2020 年 3 月設置してもらった程だ（図 3 上）。その自治会役員の一人であった著者はシカが先ほどの一般道に出ている写真を撮影し、その動きを促進するように努めた。おかげで、通行する車はスピードは落とすようになったが、その分、シカの群れを発見し易くなったので、皆さん、映える姿を撮影するため、前述のように急停車することが夥しい。かえって追突事故が心配される程だが、こういった野生動物が跋扈する状況は、明らかに COVID-19 祸による静寂により現出したのは明らかである。この圃場ではシカばかりではない。アカギツネ（通称キタキツネ）が休息し、かなり近寄っても逃げる素振りは示さない（図 3 下の 2 枚）。ひょっとしたら、誰かが餌付けしているかもしれない（いつもなら学生・教員が絶えず作業する圃場に、コロナ禍では無人。注意する者はいない）。もし、そうだとしたら、看過できない。キツネは多包条虫という寄生虫の終宿主で、人にエキノコックス症を惹起する原因となるからだ。



図3. 圃場脇一般道に設置されたシカ飛び出し警告看板（上）およびその付近に生息するアカギツネ（下；2020年初夏）

野生動物問題 or 社会問題、いやいや、そもそも学問が無い！

こういった状況に「ああ、典型的な野生動物問題だね」と見なすだろう。しかし、鈴木（2021）によると「社会が抱える諸問題」が野生動物の姿を借りて現れ出たに過ぎないと看破した。至言である。著者の大学圃場で起きたことは枝葉末節の、さらに些細なことで、こういった不自然な野生動物の進出・行動パターンの変容を根本的に解決するには、社会や経済構造、加えてそれを制御する行政など「上流」から取り組む必要があるのだ。動物と直接対峙する「下流」現場を主戦場とする著者ですら、いや、だからこそ、しみじみ判る。著者は野生種を含めた獣医医療では傍流の全てを扱う施設を運用し（浅川, 2006a, 2016）、そういった生体と死体が、毎日、運ばれてくる。

現に、この文章を書いている最中、本学圃場のようにCOVID-19禍で異様に増え、痺れを切らし、勝手に退治（毒殺）したと疑われる死体が、警察から運ばれた。これが初めてではなく、昨年秋から続く。最初、「科捜研で調べるわけにはいきませんか」と、やんわりとお断りした（授業は遠隔になり、出張もほぼ無くなっても、なぜか、忙しいので）。だが、科捜研は、まず、動物の解剖はしないこと、また、著者らが胃内容物をきれいに採

って用意すること、さらに、候補となるような毒物を一つ挙げ、それについてピンポイントで分析することは出来ること、とのことだった。＊＊靖子や＊＊樹里などが主役のTV番組のような訳にはいかないのだ。

ところで、こういった作業は、本来、欧米発の法獣医学というサイエンスが対応するが、日本では発展途上である（浅川・川添, 2021）。したがって、野生種についてだけは、とりあえず、野生動物医学の中で対応してきたが（浅川, 2006b）、気が付いたら十数年、さすがにしんどい。バトンを渡すつもりで死因解析の事例集（浅川・吉野, 2021）を刊行し、起爆剤とした（この冊子、もし、研究室や図書館などでお入り用の方は郵送します。ご一報下さい。もちろん、無料）。現在、これをネタに一般書も執筆中である。

COVID-19 で執筆時間が発生

そう、COVID-19 祸にもプラスの部分もある。それは本を書く時間を得たことである。浅川（2021）は寄生虫（病）が専門の著者が野生動物医学も兼務となった背景やその後のドタバタを軸に、この分野の研究と就職などについて概説した。参考に章題を列挙しておく：第1章 寄生虫はどこからきたか、第2章 野生動物医学を教える、第3章 野生動物に感染する、第4章 鳥類と寄生虫、第5章 野生動物と病原体の曼荼羅、第6章 次世代へいかにバトンを渡すか。2021年6月頃、店頭に並ぶ予定なので、是非、ご一読頂き、講評を賜りたい。なお、本号32～33ページで本書を紹介させていただいた。

また、この感染症禍は読書をする時間も増えたと思う。経済活性化を図るため「黙食・黙浴」の推奨が叫ばれるが、やはり、黙読を無視してはいけないだろう。著者らは野生動物医学の教育をするため、関連書籍を読み込み、書評・書籍紹介を執筆した。それを編集した冊子（浅川, 2021）は、今後もしばらく継続するであろう良書と親しむ時間を有効に過ごす縁となろう（この冊子、研究室や図書館などで置いて頂けるようでしたら郵送します。ご一報下を。当然、無料。一応、先ほどの法獣医学の冊子と共に、「農大動物研究会事務局」には、見本送付済）。それでは、COVID-19 �祸で出現した時間を、どうか、有効に！

引用文献

- 浅川満彦, 2006a. 「保全医学」の現在と今後—日本産野生哺乳類を事例に. ANIMATE (特別1) : 116-123.
- 浅川満彦, 2006b. 我が国の獣医学にも法医学に相当するような分野が絶対に必要！—鳥騒動の現場から. Zoo and Wildlife News (日本野生動物医学会ニュースレター), (22) : 46-53.
- 浅川満彦, 2016. 獣医さんと野生動物の好ましい関係とは? ANIMATE (13) : 4-9.

浅川満彦（編著）. 2020. 酪農学園大学野生動物医学センターWAMC メンバーによる書評・書籍紹介集. 酪農学園大学地域連携センター: 238 pp. (ISBN978-4-902786-25-5 C3047)

浅川満彦, 2021. 野生動物医学への挑戦—寄生虫・感染症・ワンヘルス, 東京大学出版会: 196 pp. (ISBN978-4-13-062229-5)

浅川満彦・川添敏弘, 2021. 大学で求められる法獣医学教育の取り扱いに向けて, 畜産の研究, 75 (6): 印刷中.

浅川満彦・吉野智生, 2021. 酪農学園大学野生動物医学センターWAMC に依頼された死因解析等法獣医学に関わる報告集. 酪農学園大学社会連携センター, 北海道江別市: 178 pp. (ISBN978-4-902786-29-3 C3047)

鈴木正嗣, 2021. 改めて「『野生生物と社会』学会」, Wildlife Forum, 25 (2): 表紙会長就任挨拶.